[illegible]集　十八

太政官文庫

類	號	函	架	冊
和書門	七六一四	一一九	四	五四

内閣文庫

類	號	冊	函	架
和書	七六一四	五四	二〇〇	二

内閣文庫

番號	和	7614
冊數	54	(36)
函號	200	4

国立公文書館 National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

教部省文庫印
古川氏藏

續後拾遺和歌集巻第十一

戀哥一

題不知　花山院御製

しらさりきいはれぬまてに洩さしと恋ハ思ふとたゆめしかは

権中納言敦忠

物ゆゑに心をはにわかれぬるまゆのうちなる思ひこそあれ

よみ人しらす

道のへの尾花かもとの思草今さら〳〵になにか思はむ

洞院攝政家百首に忍恋　前中納言定家

うへしけき垣ほのすゝれの小篠原しのふ思ひはしる人もなし

題しらす　坂上郎女

夏の野のしけみにさける姫ゆりのしられぬ恋は苦しき物そ

よみ人しらす

ふる鳥のよとのゝふの原下に思ふと人をこふはくるしかりけり

恋の哥の中に　八條院高倉

いはねさハ人もしられぬみをつくしのふかき思ひにしつみゆかてま

式部卿久明親王

しられやハいはぬ間の山の岩清水下にはかよふかる

平貞文家の哥合に　躬恒

久堅のやみよりふかき月ぞ空にこころのへだてなりけり　也と

題不知　忠岑

明ぬまのまその夜ゝにやゝ堰の音ひらけさ秋やちかけん

源重之女

人をとふおもひを何とましへけりむかしの八絵もかのなこそかり

今出河院近衛

雲ものはらひて入ていふく秋風の雨よりも成ぬへき小

文保二年七月白河殿七百首哥に寄煙恋

前大納言為家

いかにせんかけのさゝけもかたはいふしきしさ下の煙と

恋の前に此中に　昭慶門院一條

いとふにはうき名の相よれはけふの煙よさくらたをす

前中納言資名

煙をもいはしきりと此夕畑いきの空のやさにまよへん

建長三年九月十三夜哥合に寄煙恋

前参議忠定

おもふことあまの月さへも大あらきなくさしぬ煙の下にもえん

題しらす　法印宗圓

こかれしふねのうら此世の草にかるもふれぬおもひありとは

観意法師

きれしかつさ入江のみさりりよなひくかもめ下乃乱恵

中院入道右大臣中将に侍りける時家に歌合

し侍りけるに　　左京大夫顕輔

高ねふや岩かけにすめる白菅の縁かくれけむ昔にかはらぬ

入道前太政大臣家にて人々題をわかちて歌

よみ侍りけるに寄菅恋

法印長舜

よしさらは岩もる菅のねにたえてふかくも人にしられさらなん

題しらす　頓阿法師

杣山ねの岩の苔むす山の岩ねにかけて○いはてなかれつ

知る思ひといふ事をよめる

藤原家泰

杣山ねの山かくれの埋れ水うきにはえしれぬはしらせはやなれ

寄涙恋といふ事をよみ侍りける　為道朝臣

あふ事はいつかはまさき涙川うきみなからの袖のしからみ

題しらす

権中納言実忠

これこそは袖にせかるるみなかみの涙の川のすゑのなかれか

中文

かりそめに袖の涙をつつむまにもるをよわるや中川の水

千首歌よませ給ひけるに　後宇多院御製

世にこそは月花みてもなくさめし今の心は関にまかせてはたはす

無常の心を　中務卿宗尊親王

無にて我身なりそそあつまやのあまりにはかなき身のはてそうき

おなし百首歌たてまつりし時おなし心を　法印定為

ふるさとの下その衣ありさえのこゝろそや松よりもなかはてなん

題しらす　人麿

おもひつゝぬるとゑもなし衣かへしもかよふ夢のまよひにてなし

いはひまいらせける時よみ人に頼みせける　圓融院御製

いつまでは行末しるき思ひやるをかしもなかまふ時にをのか衣

文保百首歌たてまつりける時　後花山院内大臣

こひわひてとしつきへぬれといつまてかくれてきえぬ涙なるらんされは

百首歌奉りし時　入道前太政大臣

あひ見すは袖の涙のあはれ人のかたみさへ世にとめやさん

寄枕恋といへる　津守国助

おきの枕もしかたへきえぬるは袖にきえぬるかな

嘉元百首奉りし時恋歌

前大納言為世

せくそてにもらはのこれ思ひ渡し袖の涙の流れ世をへらせハ

関白太政大臣

かきらめく涙を袖につゝむらん人はしれぬ身の心ならねは

天暦乃御門によしそへまつる世語乃

女御徽子女王

秋の野乃萩乃すゝねに鳴虫の思ひのほとは人にしらせは

題しらす

平時村朝臣

終夜ねよもすからも水鳥の鴨の青羽に霜や置らむ

弘長三年内裏百首歌奉りし時寄杜恋

前大納言為氏

ちかひしも思ひの杜乃下紅葉いろにいてゝいはぬ事乃

恋の心そよそに知らるゝ

後鳥羽院御製

久しくも見ぬ新乃名のみたにかゝるゝ人乃心をたのみしも世ま

寄糸恋といふ事を

後一条入道前関白太政大臣

思ひつゝ逢ふにくらしき袖を河内女の手染乃糸のくりかへしつゝ

妹まつらしも

九条太政大臣

人しれす思ひそめてしくれなゐの色にあらはれぬへくなりぬ思かな

後宇多院に十首哥たてまつりける時寄色恋

藤原為親朝臣

紅のこそめやいそんなるらきめにぬれぬ袖とはいかゝ知らまし

建保四年百首哥たてまつりける時

常盤井入道前太政大臣

くれなゐのあさきそれ野にも墨染の色にあかくなかさぬ袖哉

題をよませ給ける

御製

山河のかけにかくれてつれなき人のゆくゑしらねは

文保百首哥たてまつりける時

前大納言経継

人しれす思ふ心の浦による浪の名にたつへしとは思ひやはせし

恋哥の中に

贈従三位為子

吉野河わきてしけれはいはなみのもれぬへきかもそれとや涙あふれ

大江政国女

あふせなきうきなをとなる床に六袖におちまさる涙なりけり

懐子内親王

よし河人の心のあさき瀬々りいつかうきなのなかれゆくらむ

従三位親教

あさけりやちるかとみれはみなそこにかけうつりてもそてもきよし
蓮縁法院
いつれはわれその浦にやく塩の煙ハなのことり世ならん
左京大夫顕輔家の歌合に
従三位頼政
恋しさも今ハあま海のゆくれなくもゆる網にかけられぬ
題しらす
丹波忠守朝臣
数ならぬ火の煙をみてもしかしふかきのちにあかまし
正治百首うたよみ侍りける時
源師光

心あらん人やとかめんかくつゆけき秋の袖にあまれる
題不知
俊頼
をよそみをおさふる袖をぬらしてもあらはれぬへき涙なりけり
大蔵卿左泰
うれしきも思ふハ袖にあまれけれ涙ハつゆもいろかはりけり
藤原光時
色ふかき袖のよそめハ紅の涙にそめてわかるらん
平泰時朝臣
夜深く世をしのふもの思のすさみにさとふかれぬらん
後西園寺入道前太政大臣

いかなせん人あまのかはら袖の露をさきに不ちえ恋もきえなむ

西園寺入道前太政大臣

今はたや人のちきりそ成にけりあまのかはらの年のくれゆく

よみ人しらす

秋の夜は人をまつとてそれかしそれは天の川原をこえてかさゝき

宜秋門院女御の御方にまいりしひさしく女子文つかはしてはべるを返してはべれは

藤原實方朝臣

七夕のちきりそれ秋はいと頼もしみ見えもてこそ人かさなきのちし

姫の許に女も男ひめにまかりける文をとりた

久かたの河にはやく流れつゝあら

伊勢大輔

あまた人ちきりかはすもかはらぬをたなはたつめもかはしはせさりけれ

みてし文つかはしける女のかへりことせさりけれは

まそれは流れかもしけり

兵部卿元良親王

ひこほしのあひそめぬまにあはてはやみかはまちかねつゝゆくらむ

新院御製

あかしらす

むかしの秋をまつ月はみなそこのこゝろもみつゝやさしからまし

中納言家持

春日山朝立雲乃ゐぬ日なく見まくのほしき君にもあるかな
よるの衣にほすさほ川

光孝天皇御製

わきも山嶺の雲の風をいたみちるこのはの秋はきにけり
読人しらす

中納言兼輔

春日の山よそにみし雲たちゐつゝ思ひ初をはうらみやはせん

中納言家成家の歌合に

よみ人しらす

かす(かの)よもの烟そ立けりをきあかしを(?)八重
おきゐ(?)

ま(?)雁百首の時(?)歌ことに(?)

前大納言為家

いせの海乃あまのたくなはくりかへしやそうち川のいつの月まちつゝ
（いせの海乃あまはりてかへるなみ…）

土御門院御製

紅鶏のなつみあまの浦による貝の…しほやくあまのけふりしき

二品法親王覚助

ふりまさる人を波のうき衣に年月かけてかはとさくはる

順徳院御製

みこもりのすみの江波ようち出の浦のなみそふさむるかな
うみ

読人しらす

鶴かゝ沖のあみの網によつる波ののりもむすはれぬくれ

弘長元年百首歌たてまつりける時不逢恋

常盤井入道前太政大臣

我恋もわすれ艸をおくの海乃あまのすて舟ハよる方もなし

題しらず

後鳥羽院御製

わたつ海ハつらき人の心から海よりふかき海ちの見るめあらなん

光明峯寺入道前摂政家恋十首歌合に

寄網恋

洞院摂政左大臣

年へぬる網の手縄のうちはへて心ひとつをかけぬ日ハなし

宝治百首歌たてまつりける時寄湖恋

花山院内大臣

君恋しく湖の志ら浪あはれはてしらでこそ恋まさるや

題しらず

紀俊文

ねぬなはのみたせの河にくりかへしむすひておもひわびぬる

式乾門院御匣

思河あふせもしらぬ水の浅の瀬にさそてもいはぬ物ゆへ

嘉子内親王

よしさらハかはらぬ物とおもひ河なかれてせにつきぬ契を

従三位氏久

名にし河あふせまつまにむなしくさてわすれなん

寄淵恋といふことを

俊頼朝臣

を川せ河岸にしきゝも切水のうへにかゝりてもぬるゝ袖かな

後鳥羽院御製

いつまてかむすはねさ夏は山川のなかれに涼き瀬を

千五百番歌合に　皇太后宮大夫俊成女

三くさらき結ひね水にうけても袖にやとりける月影ハ

八條入道前太政大臣右近大将に侍りける時

家に歌合し侍りけるに寄泉恋

左京大夫顕輔

我恋ハむすふ泉の水なれやたえしもなかれて袖ぬらすらん

続後拾遺和歌集巻第十二

恋哥二

題不知　　よみ人しらす

はかなしや夢乃たゝちはかよへともうつゝに恋しき人そしらるゝ

人丸

いつれのまよひよるらむ結ひ乃神も跡たえて恋しき人にあはんとそ思ふ

安嘉門院甲斐

思ひそめしのちもたのまぬ契りかな恋しのかたをねてもさめても

従三位親子

ことのはにつけてもあらぬ心をは恋しき人やいかゝおもはん

よみ人しらす

よそにのみ恋わたるかなしら雲のたえぬおもひにきえやはてなん

藤原興風

恋しさはまさるともなくたつ浪のよるひるわかぬ物にそ有ける

貫之

あはぬまを心のみこそかよひけれ我身はなをそよそにのみなる

後二条院御製

なにゝかはおもひもかけしはかなくもあふよたのまぬ人のこゝろを

文保百首哥たてまつりし時

前大納言為世

ありへて世のうくも物とおもへとやおもふにまかせぬ身とはしらし

慈寺律中よ　法眼行済

ありへてはなほたのまるゝ命とも物おもふつれなかりけれ

中臣祐臣

まくりかへしおもふことは我身こそなかれなかれてしらるゝ命なる

惟宗光吉

わか世にはかゝる命をなけきてもおなしうきよの影にこそなれ

藤原頼清朝臣

としをへて中に老ハくるしかくて世にありへてしれ身とも頼む

正治百首奉りける時

仁和寺二品親王守覚

あはれとも又をしむ世にめくりきてこゝろはかなくおもほえにけん

為道朝臣

むかしおもふつまこひさへ忍ふよはいまはなれゆく世の涙なりけり

関白左大臣家歌合

これの世のむかしのおもひにつらき身に又忍ふ人のゆくへしらせよ

従下長綱

おもひきにけれはこの世のむかしを人のとはるゝ

宣旨典侍

なれてまたむかしをしのふ人のかたりしかつまれぬらめ

六条右大臣頭中将に侍りける時歌合し侍ると
けり　　　　読人しらす
忍ふ物思ふ事ハつゝまれて聞人をまちてちかけなりけれ
宇治ハよるなかめし人によつみけれ
　　　　　　　　藤原長能
我常の物思ふ人の袂にハぬるゝハぬれて月ひとつやとらん
長久二年弘徽殿女御の歌合に恋
　　　　　　　　赤染衛門
夏にこそかはりやせまし人心ふかく忘れてまたぬ人かな
恋の歌中に
　　　　　　　　和泉式部
夏かすみかたへもやとるれハ我身の秋をしらてこそ猶
　　　　　　　　藤原為綱朝臣
我ならぬ物思ふ人もありけりとなくさむ袂ぬるゝ人
　　　　　　　　伏見院御製
わか事と思ひね覚のなけきハ心せぬ夜の月の寝覚の
百首歌召し時　　入道前太政大臣
いかなれハ待たれハつれなき中にもしらぬ我身は人のうらみなるらん
題しらす　　　　前僧正実伴
頼みつゝ待らん物をなくさめてさそふ我身に物思ふ
文保百首歌たてまつりける時

津守国基

あけぬらん秋にかゝれる萱原は木ずゑや雲のいろにみゆらん

寄萱恋といふ事を

大江忠盛朝臣女

後のよとさて萱が軒くみさきなるを出しらつゝもかねきく

賀茂経久

面影のはなつまでも出けりさへ萱が枕のこぼれおもかな

人の許につかはしける

藤原範永朝臣

昔より恋ハ後をぬ思ふならひぞとつらき人にはなさけなかりし

今まてつましらくハ恨みなもいひどこせる涙かな

人のかくる事に　　小野小町

ことそともかはらぬ物とはしりながら人をかくつまにはなれし

天暦御時歌合に　源順

たゞあめまにふくらんとあひてみれはまはあかねも成

治安百首歌たてまつりける時

前参議経清

おもしろくハあかしそのよの人をよしかもの浦のしほかさかれ

治長百首歌奉りける時不逢恋

前大納言為家

誰かいふもかくしる門をあけはまちかねの里のまに聞れて

思ひしらまし　平貞修

山の端乃たえぬもかゝらましかはてはよしぬ世をいかにせむ

法印定為

むさし野あさのこの今此年月にかはらぬかくれこゝろ月に逢

文永八年七月白河殿にて人々題をさくりて
歌つかうまつりけるついてに不逢恋

後嵯峨院御製

海のとまやや宮居乃板ひさしあはぬ月日にかさなりし秋

後宇多院に十首歌たてまつりし時寄関恋

右兵衛督為定

かはして人はとかせん逢坂の関乃こなたに心通ひし
関しらぬとゝまりせぬ名乃

伏見院御製

わするゝやさこそあめつちの関守よそ我身にをそ名こそたちけれ

百首歌たてまつりし時

権中納言公雄

今宵さへ人を見山のさねかつらさてハいつかはくるよしもかな
思ひしらす

新植

心のうさけハかひなしとはかりいつこのいそもあはれそとしらま

正治百首歌たてまつりし時

皇太后宮大夫俊成

とふ人も何よりハせんあはれその夜しもの水海乃ゝなるあらけ　よゝ

題しらす　祝部成賢

心ひく人もなけれと和歌の浦のあまの出けり縄

法印禅隆

わかうへゐとやせのあれつる縄くるしき中にをく心かな

源朝長朝臣

まつりよみける百首哥の中にみなとなれ行ゑと

名所百首哥たてまつりける時

僧正行意

さらぬたにぬる袖のかれ河瀬の世の波を袖にまうけつ

恋哥の中に　寂円法師

名のみしてさ涙の河乃みなそこハ人をしつめぬ名にそ有ける

百首哥よみ侍りける　入道前太政大臣

心にもまかせぬ袖の上ハうきこそ流るゝみなと成けれ

宝治百首哥たてまつりける時寄涙恋

従二位行家

年月ハ涙の河によとむ袖の上や恋のなかれなるらん

恋乃哥とてよみ侍りける

院御製

忘らるゝ袖の涙のうつしく袖のうへやうつるかれる月もうらめし

百首歌よみし時　前関白太政大臣

これのみは秋の半もすきぬ露の袖なほくもいでし暁はは

題しらす　後鳥羽院御製

ありあけハかさなるひかりの白菊をけふもみるそ月のかけかな

夜をまちわひく郭公まてはまたなくやまの

待乃時分より待けるまつの月を

基俊

あやめ草ハ行まもひをたえす花はこまちよりつまらく

千五百番歌合に　醍醐入道前太政大臣

あきらかに野ハいかなくてまつくさのかくしめしもひとゝき

文保百首奉りける時　前太政大臣

つゆしけきさゝの今みえや此葉の思ひのまきのはさやさや

芬陀利華院前関白内大臣

このたのむ月のいのちもいそきてかけぞうつる枕のさきん

夜乃月を　衣笠前内大臣

いかにせん山路をくれてつきぬるに衣かさねて露のたつ

前大僧正慈鎮

なにはえハ難波堀江の芦のねのこゝろみえてけふも年をへつゝ

九條前太政大臣ふ淡ゆうける

読人しらす

うくさふ和かの葉の縁まのとなれつついさこしれかるへきを
道し

九条右大臣

世のうさは和かみちのみしられつく恋しとは我をも忘す

宝治百首歌めしけるついてに寄草恋

後嵯峨院御製

逢事はひく人浅きうき草のあやめもしらすねたくまれ 久通

寄杜恋を

前大納言経長母

ちかふくにしけさもひのさくひかす信太の杜の夕つゆ

法性寺入道前関白家歌合に

待賢門院堀河

法金寺にしと紅葉は公宗の山家の?をちそらに萬の歌

恋歌とて

中務卿宗尊親王

流のうへ川岩うつ松の花乃ことしつまる花の色のさくつれ 秋

前参議雅有

堰みくハ浪こそ波の岩根越ゆまて年ゆかも神のつき さき

藤原清輔朝臣

岩ねふみかさなる山の奥まて(まて)もまた人恋しき袖は涼かり

前大納言為家

思ひ入道をハやすくやりてあかすハさけるらち山志け山

文保百首奉りける時

前大納言定房

年月ハ行くのこゝろに秋の門の月夜の人そこひしき

中将に侍ける時家に哥合し侍けるに

中院入道右大臣

あひ見しハ昔のゆめと過ハ今ハいのちのうき世ハつきさりな

鳥羽殿にて人々哥読侍けるに恋の心を

権中納言俊忠

逢ことハいく日数つもる過ハおもひ寄るこひもさひしきしらん

恋しらず

よき人しらそ

うれしさハ昔つゝみしのちの袖ハあまりてかゝるものかハ

後嵯峨院に三百首奉りける時久恋

後深草院少将内侍

恋わひやさのミハいかゝ津の国のなかへてしもまちまさらん

恋哥中に

藤原為嗣朝臣

つれもなき人ハいさめかれこそハ思ひハ心ひとつなりけれ

好不逢恋といふ事を

贈従三位為子

恋ひしねみゆるハ罪もうかれやつまこそ人の見たるかなん

平親清女妹

こむとい（ひ）し行末まてもかくれぬるわひしき人の袂を

邦省親王家卒首歌に不逢恋

祝部行親

たのましなあはぬまてこそ人の心の月日なかれは

題しらす

平宗宣朝臣

待しもれかしそ物思ふ身にはしらぬやちきりなりけん

猶秀房

忘られぬ身をくはれそたのまてはいふとてもたえすかれは

権律師浄弁

木間の言葉まて忘るゝと物思ひつらいぬちかきらめん

行末のうらみをかねし言葉もかはるは何かはかなかりけれ

大納言親房

文保百首歌奉りける時

従二位為子

契りしを人のこゝろはいつはりや河よりも深く瀬々のあさ瀬

十首歌めしありける時寄河恋を

後宇多院御製

涙河水そこふかき流れても浅き中とはしるらん

名取川ことならぬと

従二位行家

うきなからさせる世をいかなる吉野の山の中の

題しらず　贈従三位為子

うたゝねはまだよひのまのゆめならばおもひさめてもなほやなぐさむ

二品法親王覚助

ゆくすゑもおもはぬよりも契りてし物をぞつらくみしかりぞなれ

續後拾遺和哥集巻第十三

戀哥三

女乃返事もせさりけれはかけりける折にかくいひ
事もなしとて　平兼盛

おとにのみきけりける折しもいひおきし人のつらさも　わすれん

業平朝臣武蔵国いる間の郡みよしのゝ里
ことに所に住侍りける女に逢ひわたりけるを此女の父
はかはらぬ人にといひけれど母なん藤氏の人なりけれ
あてなる人にとおもひて侍りけるに母か

詠人しらず

みよしのゝたのむのかりもひたふるに君かゝたにそよるとなく
なる
在原業平朝臣
秋まふらと鳴けるみかりのたのむのかりをいつかわすれん
きしらるそ
人麿
足引の山桜戸をあけをきてわかまつ君を誰かとゝむ
よみ人しらす
ゆふくれのうきを物思ふ秋風にいかてか我も人をこひしき
基俊
ちりまかふみやまかくれの松のくれにはかなくきえし露の
順徳院御製

ゆふも又あけゆく月のかけなれはなにゝたとへん秋のよなよなさは
文保百首奉りし時
右兵衛督為定
ちはやふる神のめくみもたえなき世の中にまもれはこそ
恋の歌の中に
平兼貞
今よりやおもひたえなんはかなくもたのめし人のゆくへなるらん
鷹司院帥
すむ人のこゝろにすめる秋の月いつよりことにあはれなるらむ
光明峯寺入道前摂政家にて百首
歌よみ侍りける時
よみ人

前大納言資季

いつまてかなかめしよりも又よかり山の端をはなれ峯の月かけ
たれもしらす　大江頼重

行ちとせひさしきひかりもきよしひの山にかゝるもしらぬ山のはの月

弘安百首哥奉りける時

式乾門院御匣

まちいてゝ見れは涙にくもりけり秋わかれゆく有明の月

題しらす

平氏村

なのめにはねよりひくをおもふとも山のはそのこゝろもなし

前中納言公脩

さためて見つる夜半の月まてはまたれぬ物を何いそくらん

よみ人しらす

さわくとも花さきひとを見つるは心乃うちや又たのむ森

百首哥奉りし時　関白左大臣

こゝろとを思ひたつさやかをそさりはこれからはかなりも なくすら

来不留恋といふ事を

前大納言為氏

まのつくるちらをさむも猶もれを涙包の浪乃かへりやはせ さハ

中務卿宗尊親王家哥合に

前左兵衛督教定

かひなしむしろ枕のかへしてもみえぬたまくらのかひなし

後宇多院に十首歌めしける時寄源恋

権中納言公雄

いさせ山中なる河のうきせをおもひけくそつらき袖ハぬれまさりけり

おなしく十首歌に祈恋

藤原為綱朝臣

あはれとも今そおもふらん大神のゆふせハ神の心なりけれ

いつそにおもひける人に卯月の祭の日あふひをつかはすとてよみ侍る

藤原清正

まつや神のかけしけふハ葉をかさしてそよるかなしき

返し

よみ人しらず

これ人のかへくハかさせハあまのハまよりこれのまつしまもこえん

題しらず

安倍仲丸

秋の野の尾花のすゑのまたきてそあるらんとおもふあはれなる

常盤井入道前太政大臣

露おもき新穂乃をり尾花にしりそまそれ在道にかへる

建保内裏歌合に寄草恋

前中納言定家

難波なる芦間つくしてもかひそあはれみつきこえの一よりつらハ

恋の歌の中に

為道朝臣女

夏かりもなほ見しそ難波なる芦のかりねのまくらハ

前大納言為家

現とも夢ともわかれぬ物ハあかつき見し夢路のなこりこそひとり寝

文保百首歌めしけるついてに

後宇多院御製

あかつきの別をうくもいはれてゆふつけ鳥乃音ハをしからん

題の哥とてよませ給ひける

院御製

かへさるしらぬ別のおもひハ身にしみてなかきうらみそ

為道朝臣

いつくとて暁ことにおきわかれなにはそ鳥の音をまつらん

うへのをのこともに題をさくりて哥つかうまつりけるに

暁別恋を

権中納言公宗

まそてまてゆふつけ鳥はなく〳〵物とつゝまぬ人の袖ぬるらん

おなしこゝろを

前僧正成性

鳴ぬるも鳥の音よりも霜よりもつらき別のそらはあらせん

平維貞

鳥の音はいつはりなれやあらましをうらみてまたきもぬくの空

嘉元百首哥奉りける時暁別恋

民部卿為藤

今はとて○にわかれてのちのおもひにもあへぬ別をぞせし

兵部卿元良親王家の歌合に

よみ人しらず

激河せけとよそのねあふさきわかれし後のうきに○ぞあれ ともか

恋歌の中に

鷹司院按察

わかるさは涙もめくる袂にもあふこともかなる別なりけに

平泰時

つれなさは恨みし程はあるものをあかぬ別もおもひしらるる

前右大臣

わかるゝにたのむ契もなき人のおなし名をえ月そしらるし

遊義門院

あかつきやまたいつかへる露のおきて別る袖にこほれし なみ

本院侍従に物申て後つかはしける

忠義公

露とおきてあかぬ心はとまれるは我衣手かはきかぬる

返し

本院侍従

夜もすからとまるこころのうらめしく別は夏の夜をそうらむる

百首歌めしけるついてに

御製

月にもあやうてめぬ白妙の袖乃別れもあけの空

弘安百首奉りし時わかれを
亀山院御製
めくりあはんこれ暁をいかすまん頼まつれなき有明の月
題しらす
藤原雅顕朝臣
いかにせんこれをかきりの別かとてみぬ行末のあすなきは
又いつとちきりもしらぬ別路はつらさかきりのこゝろ
中宮
洞院摂政家百首哥中に済朝臣
藻壁門院但馬
かき別あかつきにしもたえてまたるゝそてのわかれ

ねさめしのゝめを
法眼行済
ちきりしを今朝の別の面影はあまりてひとりぬるよなよな
宿りして幾年を
藤原経有朝臣
ゆふくれを待し別門揚さそ立なれて袖の露そをく
題しらす
藤原元真
今朝よりの別くの袖もかはく衣袖に涙のかゝりけりとは
女御巌子母もいたしくさかりすきれは泪そ
せなり
天暦御製
ねさめしと思ひきれともあすさ衣いつくしあまた袖のぬれらん

あ方乃中に　　前参議雅有

をとめ子か衣にあれハせそさゝ波よ人の織なさるらん

二品法親王慈道

逢瀬にもうき世に我からたのまれて別かね中川のうら

素性法師

いつはりをしらせて縄のよしもかな命のかきり頼みにそ思ふ
まかん人ぞなき

みなれこにおもふむものゝ生おもひうし山の井かけて逢かへん

人麿

ときはの杉のおもてのこれゆへにあれにしものをゆかんさゝる秋
なき

山辺赤人

春霞のやまもとかけて秋にかはるとも山にみな法ふる

源宗于朝臣

しをそめてもときはなるをもとめしあはれぬ時の色まさりけり
の名

藤原元真朝臣

梓弓乃山

とのゆみあらまほしく引そめてよそに見られぬ我そかなしき

宝治百首寄弓恋

後深草院弁内侍

みちのくのあたちのまゆみ引つれて我のみもとに寄るへきか

土御門院小宰相

まつ山よりも出つきさらひさめてつらぬ所によありせん

建保二年内大臣家の百首歌よ名所を

源有長朝臣

持ちひさかたのつらたしくよ所人そのむかしもうるわし

家よ千首哥よみ侍りけるよ

入道二品親王性助

しきひとく聞らきハひさら常ならよあらむ世やきかよ

寛治後出を

源邦長朝臣

あられくもりにたまにまする草かくれ秋のしぬハきさらにも

百摩河の御屏風よ

源信明朝臣

花に何とめつる人のゆきへあきさえ浜よわかれけるこをき

文保百首哥よみ侍りける時

芳法利華院前関白内大臣

秋のしあきさえ浦よさ河塩のいなかよりなりて人いつくかれ

兼しらず

平師親

ゆく人も今ハ浦よりる浪の云をさそれしや須ちなかりせん

かつしひきる男のすべまるそこなしをハよる

ぬ命ともせんといひきくつをもるよ

馬内侍

恋しさは思ふまゝにもあらはれてさへなかなか命とはとめ

題しらす　祝部成久

忘られよ身はいつまてか嘆くらむあはれをしらぬ昔ならなと

廣義公家の歌合に

よみ人しらす

何ゆへそとやそれかやとたのむ言の葉にまよひぬる頭なりけり

逢後題意といふ事を

權中納言公宗母

夢とても今は定めぬ名残とも猶現まさりて淋しかりけん

寄夢恋を　光俊朝臣

ゆくも又いつかみむ秋の夢なれはさも続かぬ旅はならなん

欲絶恋といふ心を　津守國道

我中は今を限りとすさむれはちかひし秋は織りけり

西四條齋宮にまうでて神祇を祈る遥

行り　權中納言敦忠

忘れじと契りし人の花ならはかのみても悔れなや今さ

題しらす　中務卿宗尊親王

花ならぬ言の葉にまて秋風の吹くらん末もとはぬ君かな

藤原高範

あまるしこみまく川をしも女の花かれゆくも今はとはねは

前大納言實教
うつり行人の罪花みつゝはかりけて何よのことさん
後二条院御製
いかにせんつらきも乃花乃ことをめぐらぬ人ようつりと
伏見院御製
あさよ乃と稿りやこゝら月すみえぬ人の心かりけれ
弘安百首歌よまれける時
大蔵卿隆博
露かゝる花色衣あさなあさなうつりやすくハわかと移りけん
光明峯寺入道前摂政家恋十首歌合に

寄常恋を　後鳥羽院下野
石河やせみの小河やおもひ出花雨の常なれやさへ
物のあはれいかゝ女のことなる海によせぬとまつて
はかなしきかな
兵部卿元良親王
今はまたやうらみはせしと思ふ身の葉のしまれぬ村雲晴らん
新しらず　相模
流れゆく涙のかゝれは末の松かぬるをとえしれ松
まゝ
鎌倉右大臣
いかにせん命もしらず松山のうへこそ涙よかゝらぬ
思ひぞ

續後拾遺和歌集巻第十四

戀哥四

題不知　　躬恒

あひみての後さへつらき濁江のにこりもすまぬなかの契は

堀河院に百首哥奉りし時逢不會恋　　祐子内親王家紀伊

かきりあるのちはつらしな人よあひみしよはもあらましものを

典侍因香朝臣につかはしける　　近院右大臣

やましろのあやの色めもわかれ人をあひみて後のくちぬる思ひ

女蔵人二條ねたうなるをとらへて雨のふる日ちかくもおもひなからまゐらさりけれは御硯にかく侍りけるを御覧せさせ給うて　　延喜御製

濱千鳥川辺もとまらぬ波かせにかひやなきつゝあまりてそなき

題しらす　　為道朝臣

いつまてかくるしき恋にしのひてもあふよは後の別なるらん

道潜法師

まちわひてよつれと山の色あかてそえぬれき形見なりけり

藤原秀行

たれ袖に波をこえしかはかりし別のきぬぎぬの袖かれ

百首哥奉りし時　中宮大夫師賢

いくとせの月日へぬるなみだのふるしまくのあふ坂の関

前大納言為世

立帰り又つきたるてあふ坂こころしらぬかへるなりけり

冬歌木舎屋を　前大僧正賢超

袖ぬらす関の清水の面影もおもてまれぬ逢坂の山

よみ人しらず

逢坂の関路をいつにいつきえゆくはハ道さすらん

平宣時朝臣

別れ路をいはでさかりしちぎりきぬる人のかたみ

藤原泰宗

をしきに袖しぼるゝ月をかくみなれ路しらと

文保百首哥奉りける時

後西園寺入道前太政大臣

わかれし袖の別の涙にもみなれし月の

題しらず　平貞宗

まことにもみなれし人の面影をかたみ月にやどしつらん

百首哥の中に　式子内親王

別れてハいまやかなしき明の月

恋哥乃中に　今出河院近衛

うらみやは後の世まてとたのめしを恋しなはその詞ならなむ

千五百番哥合歌　二条院讃岐

おもひやれよそに詠むるたにつらき月のかけにもあるへき身をは

題しらす　兼好法師

契おきしかねことくらき室の戸に胸ははてなく

よみ人しらす

たのめしも契しことの葉も命にかへてしらしとそ思ふ

寛元百首歌めされける時寄雲恋

後嵯峨院御製

まつ山の雲もかさなる嶺の空に思ひのほかも逢ふことやなき

恋乃哥とて　民部卿資宣女

恋の人のうらみをしらぬ袖のみそ身にもそふ

好忠

わかせこか来まさぬ宵のあきかせはこぬ人をさへうらみつるかな

寛元百首歌めされける時寄風恋

後深草院少将内侍

更ぬるもしらてあきかせのとはゝいかにうらみん秋をともなはぬ時

恋の哥中に　徳大寺右大臣

おきのはのとふにつけてもうらみしを秋風のつねにはなし

平実時

洩ぬへき露の命の中〳〵にあはれなる人の猶もこひしく

前大納言宣教

契りおく浅茅か露の消ませくあはれしらるゝ文をとみよかし

文保百首哥たてまつりし時

二品法親王覚助

色かはる心の花に結ひおくかひなき露の宿はかなりゆく

寄枕未恋と

前参議為實

うかりける人の心のまことしらはかね枕の色ハ物かは

恋の心を

中務卿宗尊親王

逢坂の関路はまつもすれかし猶やは人目もる

もる人しらん

奈せきとよにかゝるたえんの心やり思ひ明くす

後京極摂政前太政大臣

うちかへし浦のしほ焼く煙の末かけて思ひこかるゝ

寄氷恋といふ事を

西音法師

たえしかも結ひし袖を河浪の水の泡のきえぬらん

嘉元百首哥たてまつりし時逢不会恋

贈従三位為子

行くまゝに契りかはらぬ恋草のしけりまさらん継橋

絶恋を　　　　後嵯峨院御製

こゑりくは若代ちられてもえまし絶くらしゆかしあれなる結

東三條入道摂政かれくなりにける海にみをゆかす

法成寺の後ならひけのにゆひてとおりたれなん

流りえけこそ　　右大将道綱母

岩けくなれ宗も絶すして日数をなにゝまよふてかきなかれとそ

文保百首歌よみてまつりける時

六条内大臣

つれなき人の咲はあさき縁にかはりこそすれの袖ものこる

関白左大臣

いつまでかいはまほしうつれなき秋のあはれのまさるともともかくはえらん

過ぬ逢恋を　　永福門院

思さらりらぬは夜もやかてはるもなきつれいもなく夢ゆめさん

おもへ百首歌よみに　　万秋門院

思ひきりそれもおもひしかはむかしのうちぬれに文もとしくさは世をやかせるかし

後撰待恋といふ事を

前大納言為通卿

何ゆへ人はまたえうけたりけれはんまつらんとてたえてたにそしつを

絶ゆ後逢恋をよみはべりける

命あれハ又もあふ世にめくりきてむかしかたりのなけきともなさらん
後二條院御製

読人不知
惜からぬ命をまちてあふ事もいまはかなしとおもふころかな
邦省親王

源知行
恵まるゝ涙のひまハ花ぬれて袖をみし春を過にけるこそ袖ぬらん

津守国助
わすれさらんひとつひもすから袖ハ又ぬれまさるかなさきなからんちり

嘉元百首奉りし時忍恋
二品法親王覚助

あはて猶こりすまに中々涙の我もともにと思ふ世の中
洞院摂政家百首に過不逢恋
常盤井入道前太政大臣

うれしさの身に余るや袖の上に人の涙のかゝりけるかな
寄鏡恋
源重泰

面影のうつりしそれは鏡にうつる心の程もみえけれ
権大納言基嗣

涙にも思ひもらぬ袖そまつうつりし面影の名残なりけり
宣有忠

偽りそわすれみし面影はさてもそわかぬ涙のまくらかはらん

昔見侍りし墻を乳母の許につかはして

よみ人しらす

ありかへし見しかともこれハむかし垣根も人の跡もなしつゝ

弘長三年内裏百首歌奉りける時寄墻恋

前大納言為氏

さはりこそ我身ひとつにたのめけりかはる心のあやなにも思ふさま

百首歌奉りし時　入道前太政大臣

たのましよひとやまたぬ夕暮を待てとはなにを云ふかたのまゝ

関白太政大臣

とふへきをたのみしらぬ縁つけて待ひとねかふかり

影しらす　光俊朝臣

ますら男我身ハ浅き河浪よ見るめなき海風そ吹く

登蓮法師

鴨井うきよの入江よふるしらぬかは人よふれそめ

安嘉門院四条

玉風筆柳けは後の浪乃ましら留

津守国夏

今ハたゝ我かけののをまて浦風吹のみ人よ見るめ中ハ

文保百首歌奉りける時

侍従隆教

打よするまゝにつきせぬかひもなし浦舟の波のたちゐに

恋歌中に　藤原行綱

根くらへ我独身の昔とも今は浪の袖ぬらすらむ

藤原宗房

人そ恨し物と今は身のなき一つを分る袖の分

弘長百首歌奉りける時懐旧

前大納言為家

数ならぬ人とうまれし身の昔のあはれそ猶なれ

題しらす

源信兼朝臣

こゝろみよ昔をしのふ我身こそ忍ぶのあはれなれ

左大臣

うしとみしこの世もしのぶかはらでも世々の跡こそみえ

千首歌奉りし時懐旧

右兵衛督為定

昔思ふことはわすれぬ我身にはおもかけそれのつきせや

元亨三年八月大覚寺殿にて百首歌人々すゝめられて百首つかうまつりし時懐旧を

民部卿為藤

老ぬれはみつゝかきそのつらしとはしゐて思ふはおもひいてや

藤原義孝

命をもしらぬ世なりとおもひつらねし昔

返り事に　　よみ人しらす

身につきてあかぬ世をおもふ人はひとへに人をとしくさきえん

寛平御時后宮歌合のうた

在原元方

夏衣うすくは君に思はねと衣に人のつらきにはなん

恋歌の中に　　如願法師

うらみんとおもひし袖と夏衣ひとへにうすくなりにけるかな

千五百番歌合に　　皇太后宮大夫俊成女

夏衣うすくや人のなりぬらん空蝉の羽にぬるゝ袖かな

寄衣恋　　女蔵人万代

さ夜衣中にへたつるつまなれや袖は涙に遠さかりつゝ

前大納言良教

今もさそあひ見せしさよ衣うらみしりぬる時のまもなし

光明峯寺入道前摂政家の恋百首歌中に　　山階入道左大臣

うらみてもあひても露にみたれけり袖のうへの山葛の下風

寄山恋を　　蓮生法師

わかこゝろの山の葛かつら秋代経てもうらみつゝかな

文保百首歌たてまつりし時　　津守国冬

うらさひしみむろの山の葛かつらうらみ来て松風そふく

題しらす　後九条前内大臣

秋のこゑの松原野のまくす原のそらは嵐風そ吹

建保五十首歌に恨恋

前中納言有忠

恨てもかひなかりけり松風の梢にさへ吹わかれし葛葉に

宝治百首歌奉りける時寄風恋

鷹司院帥

松風の垣ほの葛を吹返しうらみかほなる秋のゆふくれ

寄葛恋といふことを　後宇多院御製

山河の垣かれの葛のうらみわひやとかくに今もうらむ

嘉元百首歌奉りし時恨恋

前大納言為世

しられ葉は浦しきあきまちよられぬとも夜のま葛かやうらみん

恋の心を

中務卿恒明親王

秋きつる野の葛葉の松風にうらみしほとと又恋のくれ

文永八年九月十三夜白河殿寄合に恨不逢恋

前参議隆康

いかさんあまの住家てうらみくも恋しさまさる汐のうらなみ

題しらす　前太政大臣

国立公文書館
National Archives of Japan

ふかき江の海に根ざしみるめにはかけて涙ぞかゝれ

光明峯寺入道前摂政家恋十首歌合に

寄網恋を　後堀河院民部卿典侍

ふかみ乃あまの網のうきを縄こそ取らめぬらみはなれなき

洞院摂政家百首歌合に恨恋

従二位家隆

唐の海まつは山となりぬへし浪をもちかひもつらきうらみに

続後拾遺和歌集巻第十五

雑歌上

三条右大臣家の屏風に

貫之

いにしへも老ぬる鶴の羽や我身にそ似たる

栖とさえたる松の年久しく歳ふるを見て

兵部卿致平親王

色かへぬ年の友とそ思ひし小松もひさしくおいにけるかな

題しらず

花山院御製

入江なる松はいくよをかさねたるみるめもおひて

布引乃瀧見におはしましけるに御
ともに候ふ人々つかうまつりけるついてに
亀山院御製
しら糸の世々をへてほのなかりけるから布引の瀧
いくしらす
順徳院御製
音羽の瀧乃しら糸續たえたえけふは風のおさまれる哉
読人不知
みよしのゝ瀧乃白浪しらねともかたりしきけハ昔おもほゆ
石はしる瀧そまくれて泊瀬河たゆるまもなくみえまさりけれ
河原左大臣の家にまかりてありけるに塩竈
といふ所乃さまをつくれりけるを見てよめる
業平朝臣
塩竈にいつかきにけん朝なきに釣する舟はこゝによらなん
津国芦屋といふ所にてよめる
前参議雅経
あしのやのなたきさへ雲にまかひつゝそれとも波の浪かゝりける
弘安百首哥たてまつりしとき
民部卿資宣
にほの海の波乃花しら色見えぬ岩ねの松乃かけてかゝれる
瀧色ありしこえしと
入道二品親王覚助

風ふけはいつこの浦も明ぬらん川瀬は波の花そちる

題しらす　平兼時

浪こえぬひまもしら河邊那波さへや吹分くへの嵐風

千五百番歌合に　大納言通具

風わたる夕志ほかせは那須のさ入江の河の影も澄

題しらす　従三位氏久

われならてみかきの月にうちはへて深さみるも知らるらん

前大納言實教

つくつくと見ハてゝうちはへてこよひはまた千とせをかねてよし

文保百首歌たてまつりし時

前大納言經繼

鳥の音におとろかされて中々に出てつくつくと昔をそしのふ

元日節會殿上淵醉にて雲の上の春を壽

調子に春庭楽奏しける時よみける

御製

時もわかぬみまきの声にうちなひく春の庭をも祝ふなるかな

春の世の中に　前大納言為家

小倉山まつもむかしの名をけさかよひてや常なれ

前大納言為氏

いつしかもかはらぬ月をみるまゝに昔の色を思ひいつらん

宇治関白前太政大臣かよひて侍りける時春比
法住寺くみの日宮乃御方に花山院
まかり出まうでふたひとつやまぶきの宮に侍
ける人のもとへつかはしけるかへりことに
法性寺入道前摂政太政大臣
みゆき山宮やつかへんと思ふまに心乃やまにかゝりけれ
野へにかくれけるかさ母の宮にかはりて
つかはし侍りけるとて
中務卿具平親王
ふるくさの春をつけてせ給ふかうら宮に法まゐる
ものとくちなれ

春の哥の中に　前大納言良教
末とをき千代のはしめに開くそめけるを梅の春やつとしき
梅花をよませ給ひける
崇徳院御製
梅花さけるわたりをとめくれはむかしの人かをるとそいはん
題しらす　俊恵法師
鶯のなきて来つる梅か枝に結ふ露やみたれなるらん
紀淑氏朝臣
ふくとも梅乃香のかはあらしにかけて春風
建保二年内大臣家百首哥に詠花

前中納言定家

ふりにけりまよふまれ桜花ちらくる宿の花さへそなき

待花といふ心を　　入道後京極前関白太政大臣

桜花さやもさかん宿はあれとれかる光の心隠しそ

落花といふ事を　　為道朝臣

ちりにさそはさこん人かなしけれとさそふみよしのゝ

深山の花のつくま大嘗会花といふ事を詠

御代そ治まる出くるを待むら

前大僧正道昭

あらしや吉野の奥の山さくら見ん世の花もおもひわかなし

題しらず　　前中納言資實

世をとへて千年の花にさかりをも今日ぞ都の春をしらなむ

前大僧正禅助

わかれこそ千とせにたえぬ春のさかりさのこはいつくに花を咲らん

二条院讃岐

咲初て世にちらぬ花のはかならぬ人の秋の別なくもかな

藤原景繁

のちの世のむかしに帰るはるのいまつらん花ハかへそまし

源兼氏朝臣

桜ちる露もまねくとおもへれハ老木乃花にも春風そ吹

文保百首哥奉りける時

関白太政大臣

今日の春なれとも時しらく吹からみる宿の花乃しら宮

春哥の中に　　二品法親王覚助

露む秋の月よそ仰けは思ひ出つれはちる物を春の首ハ

後宇多院に月五十首奉りける時

前大納言為世

花の色の春やむかしの秋をこんかけてそれ露の月影

亀山殿七百首哥に苗代

後宇多院御製

せきいれし水の流れハくまなくや人の心たのむらん

民部卿為藤家人々題を申侍ける時所の

事によりつきて侍りけるに遠き侍りけれハ

中つかさりける　　権大僧都公順

初未を打出て見れハ遠山にかゝるの花とみる

民部卿為藤

初花も打出て見る山にかけよ水の花なるみ

慶をよみける　　前大納言公泰良

みよしのをいくらか世よりひをかけてもさぬ方のなかれ

雅宗忠房

あられぬ神もあはれの葵草けてふもみちの縁せし

山家郭公と　菅原在良朝臣

郭人まらん栖と山里にやすむもつれは保らぬ

元亨四年後宇多院に十首歌奉りける時

山郭公　権中納言公明

たか升山のおりてこけハ人里のこゑよりこそ聞かむ時

和哥所にて釋阿に九十賀給ハせける時の

屏風に　宜秋門院丹後

時鳥おりハや升をこえぬらむ瀬をまけの鏡にとかく

郭公とよめる　小弁

まだき孫そおもふ一聲を待ちつるをのれのとこそさなき

平義政

郭公のこゑ五月とさせてや五月雨ふる曙のそら

五月雨　賀茂基久

五月雨はこまに乱れ橋もれて行くさらに山ぞする

よみ人しらず

久方の日数もふりぬ津の国の名にしおふ橋の五月雨の比

郎首歌召し家五十首歌におなしく心を

鴨祐夏

八月ハ夕しほかせこしてみちのくの野田の玉川清きせせ
とし
残暑にかはりてさひしき人の聲おもしく詠ハ
みな月ハりに出人のさうさうせられはよみの
れて待られけり　よみ人しらす
うらみせんは鳴つらしせん郭公君か為なと聲を押
とれ
夜前式中に　法性寺入道前関白太政大臣
八千とせあかりうるはしき夜の雑数ハ君の千世に秋はかけね
崇徳院百首の哥九月十三夜
皇太后宮大夫俊成
くもりなき消ぬ雪の光にや世にありとある人ハみなさへ
とせん

題しらす　藤原彰氏
神のますく露はかりもとまりて人や秋の夕くれ
後法性寺入道前摂政家の秋廿首の中に
藻壁門院少将
とふ人ハあらぬ浅茅の神の宮よそく露やむすふらん
寛元百首歌奉りし時秋夕
法印定為
心あるはさみえ植かし花ふたつくらひ月秋の夕くれ
題しらす　よみ人しらす
秋されハ尾花かもとによる露の色あをく我ハ袖にかゝるな

文永八年七月七日白河殿にて人々題をさ
ぐりて歌つかうまつりけるついでに

後嵯峨院御製

墨染の袖にも秋やかよふらしおもへはさける萩か花すり

題しらず　　よみ人しらず

秋くさは露にくはとりおかしけに何くはゐるらんとや

新院御製

今はたゝ世をも長月の秋の夜の月は見しよりことに見えけれ

土御門院御製

すむ世の秋のならひとおもふにはひとりしられし月なからめ

山里にて月をみてよめる

小町

山里にむすふ宿をてらしつゝ世をのかれぬる秋の月影

中務卿親王の家にて法師のよみ侍りける歌を見てとかくの事をもよほしさふらふへしと申し侍りける時
詠侍ける

二品法親王慈道

露きえし秋の名におふ山の月むかしの夢をのこしてそ照

前大納言定房家にて月十五首歌の中に

詠侍りける野月

権律師浄弁

むかしの秋にもあらしてさ（く）ぬ山も秋の月は影ももとめそ

たいしらず　津守棟国

わくなる老の涙の数なれや秋しの袖は月影

名にし奇清河原よ　津守国助

信濃なるさらしなわさ夜のく月によその里

月のかつくくらへる　藤原親継

久堅の月の光は林の色も時わかぬ深き紅葉かな

月落葉といふことを　信実朝臣

かきくもる雨やいつしか落ちの葉の夜の嵐の露

題しらず　土御門院御製

紅葉の色はてし山の椎柴も秋をしのぶ枯風に吹

よみ人しらず

むすぼほる河の梢も見えぬまでちらぬ紅葉

大江宗秀

ちはやぶる神なびやまの渡しつゝ河風も寒し同じ梢を

我わかれても折ひとふ竹なる人のあらしおろ

しも露のいそしら吹きちる吉野山のよ

こゝろにもかくとやすてつるまゝ流

山田法師

吉野山紅葉のちりかゝるその風乃音なれや

しき

題しらず　基俊

もみちかりの霧もさむけれはすゝしくもあるる杉村

文保百首奉りける時

後西園寺入道前太政大臣

雲かゝる山かけの夕時雨ふる秋さそて年をふりけり
ぬれしらす

忠見

神無月いつもふるなる世の中におつる涙そ時雨なりける

嘉元百首奉りける時

権中納言公雄

神な月老の袂におきそへてなほ見えし河にふる時雨哉
ぬれしく哉

伏見院御製

袖ぬれそ涙ふる時雨して我身世にふるほとそかなしき
我袖高光家にまかりて侍けるに

時雨ける日まかりつかはしける
おりにて神無月の比ならねとも

安法法師

今はとて世代のそれそれ独もちよひしらや遠き葉ちる
比

建保五年内裏歌合に冬河風

皇太后宮大夫俊成女

橋姫の衣ふきすさぶ冬の霜ましひくなしからの
川風

式子内親王

ぬれしらす

真柴の葉乃折もむれて散れくるる月の影
哉

輔仁親王

柏木に何か浅茅ニ庭ハとられて何とわかれの玉とならん

信實朝臣

今朝よりの時雨ハ宮に織よりさそよ枯の色にされとて

弘安元年宇治橋供養の日亀山院御幸

ありなくは雪にぬれて待たれい

圓光院入道前関白太政大臣

行末もなほハ流れてなかめさこの宇治の橋はしく

題しらす

前大僧正隆弁

あらはにしはとめし白雲に山の雨そもあらぬ名されん

藤原基明

いたつらに積れる数はいとひても我身をさらぬ年の暮るゝ

山階入道左大臣

とまりゆく月日はかりかしらぬまに身をそへてつもるとしとせ

弘安百首哥たてまつりし時

前右兵衛督為教

あらたまる事ハ昔にかはらねとつもる年そかなしき

弘長百首哥たてまつりし時歳暮

常盤井入道前太政大臣

惜しかりし年をもをしく暮ぬれと月日はかりをなをもおしむかな

続後拾遺和歌集巻第十六

雑哥中

題しらす　土御門院御製

しつかなる心のうちも久堅の空にくまなき月やしるらん

前中納言定家

なかめつゝ思ひし事の数〳〵にむなしき空の秋の夜の月

殷富門院大輔

うき世をもすてゝさためなきいつかれは抛出つる秋の露の月

長恨哥の心をよみ侍ける

道命法師

思ひきや秋の雲井にかへりきてむかしの月を見んとは
清少納言清水にこもりて侍りける比月いとあ
かき夜ひとりながめ侍りけるに
清成卿入道前摂政太政大臣
思ひきや山のあなたに老ぬれて住秋の月を見んとは
久安百首歌よみ侍りける時
式乾門院御匣
秋とへて老と成まで別にし月より外のわすれかたさ
知らず
平宣時朝臣
いにしへハ思ひもいれぬ暁の寝覚ハ老のつきさなりけり
菅原孝標朝臣女
行の末乃さやく秋とよ寝覚して行するまたにぞ掲れ出しとき
文集草堂深鎖白雲向といふ事を
土御門院御製
苔深き峯の庵のさびしさハ雲にとざしの明りぞみえ
恵經若を
伏見院御製
いかにしていかにもせん山のはにかゝる迷の雲晴ひら
大峯へ入とてよみ侍ける
大僧正行尊
山路こそやかて行のえなさしまんうき世の中へかへりこそせね
是ハ

題しらす　　源長綾朝臣

世中のおもひつゝきも山里ハとはれぬ人の絶まなりけり

寂蓮法師

山里ハとはれんとやハ住そめし音せぬ人を何かうらみん

百首の歌の中に　　式子内親王

さひしさハ明ぬ夜かけて柴の戸にいふられにはしらぬ嵐のみして

弘長百首歌奉りける時山家

前大納言為氏

とふ人もかけひの水のたえまにも身をしらぬハ此世なりけり

宝治百首歌奉りける時山家水

前大納言為家

小倉山ふもとの庵ハむすへともせく谷水のきよまれぬ世ハ

文保百首奉りける時

権中納言公雄

のかれても身をハ山にそとまりける山花の余所におもはれうき世

山家の心を

前大僧正良信

いとひ入山路のおくに栖ても心そうきハやとなりけり

藤原泰經

うき事ハ猶もありけり世のなかをのかれし家も吾子の為

惟宗忠景

山里は世のうくもいかゞせん浮世に心すみもやらねは
前大僧正道玄日吉社にて人々にすゝめ侍りける
歌の中に　　　　源兼氏朝臣
うかりける我身の松山ねなれてもなほあはれなき人の心を
寶治百首奉りける時松山
　　　　　　　　従二位成實
いかなりしむかしはきえて待わひて松の松によそへし浪のこゆらん
述懐の心を　　　高階宗成朝臣
あはれぬる谷の松しも名のみして山かくれなる身のうらみかな
　　　　　　　　前大納言為氏

わかれし世乃契やのこるさためなき身のうへにやとむかしをしのふらん
　　　　　　　　前大納言為世
水ならぬ心の道をたどりつゝ世々に流れてかくもありけれ
前大納言為世母にかはりて春日社卅首歌中
に
　　　　　　　　民部卿為藤
わかのうらとこそきけかやくあまのとまやの煙なるらね
百首歌奉りし時　前大納言經繼
藻しほ草かきつくしても和歌の浦の君かあはれの思ひやはせん
題しらず　　　　平貞直
かひなきは和歌の浦にもあしたつの身をなくさめもせんかたそせん

源高氏

かきあつむことの葉からも此度ハかへりてともまれ和かの浦波

藤原範秀

数ならぬみハ何なりとも和歌乃浦の波にひかれてなをやかけまし

大江高廣

ことの葉乃まよひもしらぬハにこゝろにふかき恵ミとそしる和歌の浦 永

藤原隆教

うけつくもの神ハゆるとも世人ゆることハのゝ世和歌乃浦波

前中納言定資

世ゝの跡道ハ和歌乃浦千鳥ふミとゝめける跡もあつかれ

法眼源承わつらひ侍りし時相傳の文書をそ送りつかはして侍られハ

法眼行濟

和歌の浦や世ゝにかくれすまし乃跡をとゝめて跡をかきみまし

返し

法眼源承

あはれの世ゝにのこさぬ跡かきおけれハしらすれハ世ゝに和歌の浦風

藤原長遠

題しらす

和かの浦やわかにもあらぬねかへする河ハいまはいくさも波にまかせて

亀山殿にて人ゝに七百首歌つかうまつりける時

権中納言公雄まゐりて侍られハよみつかはしける

丹波忠守朝臣
和歌の浦に世々の流かさなる花の波又立かへる御代の光
影しらす　法印澄測
君かためつかうる道あると数多の人まて世にも絶ぬ名の
法眼慶融
世にすくれぬこれの末ともふる人なく絶ぬるそ
僧都通敕聖教勝をあつめて侍けるを今
つたへこそ　前大僧正明覚
家の風吹清めしと傳ふるのいくて流れをかはさてもつくへき
山寺はゆかりの法の茂なる人の許よりたえぬ物

世にしくわすれてもらひ流れぬる播の根より
つけくれはそすなれ　藤原高光
あの世はおやのそれゆけは猶もむかしの昔の代人くもなし
外記廳結政所は古家の跡のまゝ形見を
まもりしてあれそそはれてくらある
中原師光朝臣
宮しへの家に代数の宮をしらるゝ明かり和のころね
天平勝寶四年聖武天皇左大臣の家に
御幸しありける時　井手左大臣
葎はふいやしき宿も大君のまさむとしらはたましかましを

よへのなかのことゝも心有流ゝうきもつらしといはくは

朝尊親　御製

露よりも猶こぼれける萩の花われもいそく朝まけりを

昔の人の許よりみてはかなしけれ

源宗于朝臣

君ひとりこたゆるやうにや宿の庭も露ましくなりぬへて春の

詠さしくとそつまさきはけるなりけん人も春の流つらい

もつら

出羽弁

あふさかの関の哀つて流うをしき物し人をもさるれ春まて

上東門院日記かゝまつりしく常のやう一

よつ世ならにうき代なり世はあうとそ

西院皇后宮

思ひもあまる代にうきかう身をしたいかなる世にかはかならねん

いにしへの山の月の影のかけつゝひのそてそ恨の

物とか思ひつけなり

先後朝臣

思ひあはせの心も世のあとかたも二三のかほを寄せ思ひてかたり雲

ながめくもそ

前僧正公朝

花ゆへそきみをは世の思の物をかうして世にぬる人の雲

平宗盛

此世山の雪や晴のんみしも見へぬへ冬世の掃

式部卿久明親王

暮ぬなり鶏もねくらに帰るなりをちこちの入あひのかね

よみ人しらす

いかにせん身を浮さそひ山のとふ人もなき世の中にすむかひもなき

前大納言経光女

風さそふ宮のこれ行らくまにさむきやまのとよむね世を歎くなる

寄竹述懐を

権中納言為藤

呉竹もしくれにさえて山の里に窓の呉竹

嘉元百首哥たてまつりし時

二品法親王覚助

うき身にはまたぬにあかぬ暮行のとしも老行世にふるらん

題しらす

藤原為顕

みなれぬる志の孫にまたふかき哉思ひけれは世を

山里に待くらす人のをとつれて待もあらなくに

右近大将道綱母

身ひとつのうくなみ流とも道はあらし浦のねに哉

題しらす

大江千里

都までは立しくれまた志らてすみかのをしむ人

前大納言経光

数ならぬ身はなれてはかなきのこゝろをかなしみ

安嘉門院大貳

わらさはくほとふのうら浪んうさりとも河のあまひらりふ

藤原景風

たつ浪をおりはへあまれて身は命をかけてみるめかるなり

寄船述懐を　　讃天門院

いつまてかよるへさためぬ海士小舟浮世の浪にまよひはてなん

伏見院御製

浮しつみ世をわたる海士舟のしるへしらぬ力によるそなれ

前僧正道性

さためなく湊のあしまにもまれはさりとも世には縄はあかる

永福門院内侍

浅き世にさほさしわたる河舟の心もゆかぬ世をわたるらん

述懐百首歌よみ侍りけるに河

皇太后宮大夫俊成

宇治河瀬々にも世わたる身のしつみれとこれも流しれ

嘉元百首歌奉りける時おなしこゝろを

前右大臣

君か世にあひて渡河のかくしも身もよしの盛れしためしともなれ

題しらす　　藤原貞忠

なかれ河いかなる瀬にかあらはれて数ならぬ埋木の人にしられん

性助法親王家五十首歌に

後西園寺入道前太政大臣

冬なれや小塩の山のまつよりも世をしる色は國乃錦川

文保百首奉りける時

前参議為実

はるくらしみつの中山峯さむみ月もさえけり雲の岩河

入道前太政大臣

月水の影と思へは晴のあらしにうつれる世紀の岩河

関白太政大臣

秋の風波ねすゝれ君か代のふかきにあかれけんとかはりの河波

前中納言定家卿に仰て為忠朝臣を

よませ侍りし歌中に為家中納言よみける

まいりける　前関白左大臣

いにしへの深き契りのまゝにまたむかしにかへる中川の水

民部卿為家

前立ちるや絶えし中川のながれそはるはこれ

右月のむまさきへさらに清の命婦

銭許にうへんありとなくしくとゝうらんに

も　良峯宗貞

ある人のこゝろ深くの心をのこしそへてとこそちん

めかれ人に物かゝりける女の日人のわすれにける
遣りて侍りければ　清原元輔
涙かはひうちそへし夜河かゝらせましと神もなきくれ
人のききぬと高安王に遣りつるぞ
大納言旅人
残さぬを人にきかせそあひきなくは男がにまさらまし
藤原顕輔朝臣　源時登の露人をぞ待
なかなかに物見車にあふ扇のつまよりのぞくつれなし
ける　よみ人しらず
宮人は物をも思ひ出門の山おろしの衣さへこそ日かされ

前中納言定家卿の後京極の人々とて遣りて
にて　西園寺入道前太政大臣
きのふやむかしの人の心をもつけのとくしてよそにかはれしる
なし　前中納言定家
後撰の時そともれはこよひときかせぬ日数のまされ　ぞかし
扇殿いまさゆかされさかきらに秋吉訪ぬ
て年まから命の中には
正三位重氏
天津風やそのへまてゆる人をよし女の姿と年よるえ
千五百番歌合に　前大納言兼宗

位山あふ中かくの路すゝん岩ねをふみかよふ道のくるしさ

題しらす　たゞ侍為具氏

まつひさく見られ祈りるをも撫しらさ猶も拝ぬ世にあふこそは

嘉元百首歌奉りける時述懐

従三位為信

うしとても君につかふる教なれは身にかへてさへ世をはなれかたし

前大納言實教

とかけするん人をも拝ぬ我道の世をしれ教あるとは教ます

百首歌奉りし時

前中納言定房

一まつりこと人をも思ふ教を思ふ聞てもみなみのまくあれとかし

御製

世おさまり民やすかれと祈るこそ我身につきぬ思ひなりけれ

文永八年白河殿にて人々に花をさくりて

流るゝもありけつゝいてくり

後嵯峨院御製

ゆくまへ人すら轍をとゝけくれ世をおもふ身は知らくこし

続後拾遺和歌集巻第十七

雑歌下

百首歌奉りし時　関白太政大臣

静なる老の寝覚に思ひしく夢も昔に遠さかりぬる
ぞしらず

後宇多院御製

むかしこそ恋しきまゝにゆかしけれ老の寝覚に思ひ出つゝ

嘉元百首歌めしける時河

吉野河うしとはかれぬ岩波のよるさきむかしの名残恋へても

懐旧の心を　前大納言為家

ふくるまで秋のみなか縄あはれむかしとおもひて忍つゝ

法印定為

過にしもむかしかはらぬ世なれども月日の積りぬるかな

亀山殿の七百首歌に懐旧花といふことを　権中納言公雄

めくりあふ昔を今に思ひ出の桜にまさりて残る花かな

老後懐旧といふ事を　津守国助女

昔人を恋ふる老の身ひとりとおもふに涙の波ぞ隙なき

百首歌奉りし時　二品法親王覚助

むかしそのかはらぬひのなくさめもなき老の心やなぐさめん

題しらす　法印良守

思ふ身のあさましきにまきるゝ涙しさは衣のうらもしほるらん

平宣時朝臣

はる乃あはれはあはれ人のなさけにしをれやとしらん

前参議雅孝

なきあと我むかしこそ思ひはすてしその結ひのこゝろをも思ひやれ

藤原泰宗

あひかたき世の有さまそ人はそのへに山の端乃月

山階入道左大臣家十首歌に懐旧

前大納言為氏

あきはてゝ空にすみける月影に御おもひありけるかなしかりける

かなしきをつゝみし人もあらはに思ひいてゝしのひあへぬ哉

前大納言為世

文保百首歌奉りける時

前権僧正雲雅

過ぬる月日はかへり見し月日をそ思ひはかりしむかしなりける

題しらす

藤原秀賢

ゆく人はおなし月日にへてそゝ心はかはる世に何かしらん

能誉法師

思ひ出て見よむかしのなれる世は何の昔のなこりなからし

源光行

なひかるゝこそあはれ人しもふるの六帖に一首あり　新古

ゝし喜光園入道前関白家十首歌に月前

懐旧といふ事を　　源兼氏朝臣

月みしも我身の夜ハわすれぬ世まて昔恋しき姉をおもはさりき

後宇多院に百首歌奉りける時

民部卿為藤

おもひ出る折りく月も今はけれとしかや袖の涙なからん

文保百首歌奉りし

二品法親王覚助

ちらくちる花の涙乃しらくもをねてハ苔乃袂なりけり

旧枕古衾雖無といふ事を

前大僧正慈鎮

いかにせんかされし袖をかつしきそ涙よくハ流れてありけり

題しらず

藤原基家

いかにせん月も為ね池のまかせむさき草ハ流るゝれはかれ

後光明照院前摂政左大臣

かんねまうしかたの塊の鏡乃影ほうへきさの露のよりさき

弘安百首歌なりける時

大蔵卿隆博

八

いくつ年のなかん事をまうさはつもるへくはみや歌りん

前右兵衛督為教

いさゝくも世にさのこはいかに歌んおりくは人の数にぬかなと

題しらす

津守国助

かくてつまさは此世は命のうちまてとは思やはせし

成尋法師母

数ならぬ身とうきさやおかりの世にあらへくとは思ひきもあはと

法眼行済

うきよにおもひてはなるく所はへいはみのの末は誰にかゝさん

昭慶門院一條

数ならぬ身は何となき世にくてもかつしくもん果もしらぬ

身もさつ[illegible]人てすかまんぬまれ

読人しらす

数ならぬ身は何の末と思ひやるへくさりてそれは世をさくさん

つきもちはまゝ[illegible]けりまてくみとるへくさあれはわまし

題しらす

さわらもとも[illegible]はなくまてうきこゝろ[illegible]にめくり神かな

祝部成茂

前僧正慈慶

ちゝのさくらはみかの花橋柏木のはさへさゝらさまし

弘安百首歌の中に

亀山院御製

ゆく人もあやふき此橋の命にて世をわたる方も昔しりけん

述懐　　　　中務卿宗尊親王

世中のうきにハ家てある物を何とこゝろのなほさそふらん

よみ人不知

世はかくてこそくれさらし山寺にも夜ハなつかしの松風の声

寄山述懐を　　　前大僧正良覚

我ならて心の物くるしからぬ思ひ極の山に宿もとめてん

北山の家にて十首哥よみ侍りけるに月前述懐

後西園寺入道前太政大臣

思ひやるかたも山路の月みてもうき世の外ハなほ有明の空

影しらぬ　　寂蓮法師

よしのはれねはこさハ我もりくれならん世ハうき物そ山のをく哉

好忠

われハたゝよをうけすては世ニ世の中に我身ひとつハ住よしのぬへき

よみ人しらす

うしとてハ心にかゝハやらすをみハあらてう世の中くるしきハせん

前大納言為家

なかしと思ふ身のことはりもれ我ぬ衣ありけり世のむくひハうふ

覚懐法師

数ならぬ身はなにとなくもいかならん心は何の世にしとまらん

弘安百首歌奉りける時

二品法親王性助

うき世とはいはれの池のいひかひもなき心のわかるゝもなれ

法印定圓

いとゝ猶みはうかりけん此折の空のあはれも世なりけり

別しらす

藤原長經

身のほとはよそにみのわかれしもおもひくらへ清世のなかはん

祝部行氏

一すちにおもひさためぬこゝろこそふかくうきも浮世なりけれ

藤原泰宗

つれなくも世にあるてもいとふなれをわすれいつまて何頼らん

平行氏

そむきえぬ心ひとつにおもわすれなき身はなほすて世をとちけらん

前大僧正親玄

捨かねて人をすてぬ身こそ数ならぬ世すてしかひはいつまてか

大江茂重

いとふへき世をしらけれは人の上にてそねらひはしれ身なりけり

前曉法師

捨やらぬ心身をなく中々にすかれは捨はつ人のはかなさ

源宗氏

おもふ心のうちは明しくもみのゆかしは世をまさる歎す

弘安百首奉りける時

安嘉門院四条

何事もまちえぬ身にはさしもなをなからへまほしき思ひなりけん

述懐の心を

権少僧都良材

何くも世をのかれし物を中々にうき身をうしとおもひけるかな

法印長舜

すてしとも思はゝ心は猶さそはれぬきさても世をは嫌ひ添かりけれ

禅心法師

さもこれはかはらぬ後の浅からぬ老となるらん身は人のうらは

従二位経尹

うきことも又いつはりのなきみのうちにまつはくはしるらん

入道親王尊円

うき事は身にあまりて捨しかどまだあはれなるつゝむ涙かな

文保百首奉りける時

権中納言公雄

とにかくにうき身をすてかねつ世はいつとなく捨ておもひのこさん

題しらず　よみ人しらず

中々にうき世のかれし物思ひはさらにしむ我身の心なりけり

法印圓修

のかれくるおもひそうき事をうけしそ心はすてぬ世なりけれ

證一法師

さかりにはなをと枝も霞くらはすみかへらんゆきそ思ひは

藤原盛徳

老の世に物思ひけてあかなれはしらぬ夢のさそふらしむと

行念法師

うき身をは思ひすてしかの事をわけて誰ゆへ人あはれ袖やぬれなん

宰相典侍

身をとふそへは世のうきことのまさるとを忘しきみやこにをしみ

世にふらはいさその後の月をみむ枯る草

花をとる人のつかりしきられは

陰明門院大弐

露にぬれし野原の薄花なくとも袖の色つれなかれ

宜秋門院丹後かくれ侍りて又の日後京極摂政のもとに申つかはしける

前大僧正慈鎮

家をとふ人今はなき蓬生のもとは露の袖やそらん

返し

後京極摂政前太政大臣

よの中にかくぬれそ袖しかるへき蓬生の露

やまざとはひとりなからもこゝろとゝめてなかれん
そのかみ人よ消息をかはしたりしよく（？）つねに
すみぬ世のさためなきもしらずよ思ひなれてまし
つゐに
　　　　伏見院京極親王守覚
かりそめにやどるとはなき思ひのうちの宿をこそ思へ
きえはてぬ
　　　　よみ人しらず
はかなしとたのむまつりの世にうかれしはもろともにの
ゆくへよりのちにもあはれをつくるつゆのみ
　　　　源季広
新古今集の百首の時

津守国冬
さはりなき心のまゝにまかせつゝおもひのかなりぞある
　　　　贈従三位為子
かへしても代神代をひくまゝにのこらんよゝくみかゝる光はさし
亭子院の長恨哥の御屏風に
　　　　伊勢
紅葉に庭もはらはぬ袖とをみえしとおもひつゝきや
世のつねにまさる事にもあらぬ
　　　　よみ人しらず
いにしへの世のあはれをやらて神代さへにはかなきよにぞふる

中臣祐春

おもひねの心のそのいつまてか世をいとひつゝ身をすまして

山階入道左大臣家十首歌に述懐

源兼氏朝臣

うき事をうしやと身をそむきぬる身は秋の袖やおくらん

読人しらす

覚人鐘上人

身の中は身もうつゝもゆめなれは見れは身は夢と現としれ

僧正聖為母

うつゝこそうつゝのかひはなかりけれ身は浦さすらね夢の世なれは

権大僧都浄道

みくもをもありしうつゝを思ふ身は猶ゆめのむつかしきなかれは

入道前右大臣

うしやたゝ心にまかせて身の世にし思ひ出もなき我身なりけり

往事似夢といふ事を

普光園入道前関白左大臣

あさましとおもひし事もさきの世も身になりにけりいやはかな

為道朝臣

うつゝにも今そうつゝとたのむなる夢のむかしそ身にかへるそ

続後拾遺和歌集巻第十八

哀傷歌

題不知　中務卿宗尊親王

人の世はなかれてもやさは山の岩ねにあらぬあはれなれとも

大納言師氏

氷の面にうかひてなかるゝうたかたの消ぬまてにも世中

源重之

水の面にうかふわか影吹風のまにも小舟のうへもうきしつむらし

従二位家隆まかりてのち年の暮に思ひつゝけ侍る

正三位知家

人の世はそれかあらぬかきゆる夕煙しはしたちてもきえてこそ行け

題しらす　藤原隆祐朝臣

鳥部山きえにしあとのねさめにもよそにかなしき煙なりけり

かのそて侍る人かなしくて後のわさし侍るとて

前栽によみ侍る　藤原高光

たのみこしひとのこのもとのさくらしゐかなしくも猶ちりにけるかな

権僧正かくれてのち後の事なとし侍るとて　藤原義孝

あはれなる世の中に今はなかれとも思ひいてさ

世中にさきたちし事を思ひて

太宰大弐高遠

時ならぬ我身なれともおもはねは風待花のやとりとはれ

上總おやの思ひにて侍ける比とふらひて侍ける

堀河院中宮

墨染の袖乃涙にかの花をとふはなき人乃心なるらん

為道朝臣身まかりてのち五月五日贈侍之

経為女か許に申つかはしける

権中納言公宗母

袖をもかけて見よあやめ草門にかけつゝいまはのきれを

みれは

従二位為子

あやめ草何にかけしとおもふらん今はかひなき袖のうきねを

萩のちる家にて風の吹けるに世中の

はかなき事をおもひつゝけて

増基法師

いかにせん風にみたるゝ萩の葉の末の露によそへられぬる

観身岸額離根草と云詩の文字をかしらにおきて

よみ侍りける歌の中に

和泉式部

露をみて草葉の上と思ひしは時まつ程の命なりけり

題しらす

よみ人しらす

わか身ハ法師にてもありぬへし誰か此世をたのむとは見え
大臣兼朝臣ありて石山へまうてき
けるに山法師ならて草の庵に明日のをしち
よみ侍りける　　　藤原兼門
明日さへ待山下露の消るまても見し継よりかね
従三位為子身まかりて後その日改めて為
藤もくめ侍りける中に月前思故人といふ
事を　　　従三位為理
なれゆくのみそよみそや思ひ出の寺杖の雲は月
祖母身まかりて法性寺なる所にまかりて

侍りける秋月をよみて
隆信朝臣
きみの住む月も悲しきやすらひけの袖
も月乃まちつる常住院の秋みそそく人海
りまてれ侍りける清侍りける
山本入道前太政大臣
心ある激をさしうつる衣孫前のゆふへん
母の思ひに侍りける時前京景深かりしを
流けるしける　前大僧正禅助
こうれに孫の杖もかれぬる下葉に秋る露のゆかりを

返し　　　　　　　　藤原景綱

秋はさらにそれの枝の露までもゆかりときけは涙落けり

をさなき人をうしなひ侍りける時よめる

安嘉門院大貳

何ことにのこし消にし露のゆかりとて育にこふも涙なるらむ

前大僧正守誉身まかりて後よめる

能誉法師

草葉にはかれにしあとの露なれやかのこきふかきなけきそて

題しらす

前中納言為相

消かへる露のなさけをそれ思ひさへむしまひなき袖の露

伏見院かくれさせ給ひての比時雨ふりけれは

よませ給うける　　院御製

露のまをしきの上の秋の夜衣けふまて袖もまされけり

題しらす

雅尊親王

ねさめもあくまて宿とこそきけは雨も涙もふりまさりけり

後深草院大納言典侍の母身まかりての比

九條左大臣女

かみそきし出つる雨衣涙の袖のかわく間もなし

父のみこの服ぬきて肉まいりて侍りける時

よみてたてまつらせ給ける

女御嚴子女王

今朝まてハ我身なりける墨染の衣乃袖とおもひやるかな

通房関白身まかりて後宮衣奉るとて

事をよめる　　高階宗成朝臣

我身こそそのかみもしられけれ墨染の袖

後朱雀院かくれさせ給ひて後御忌日に御誦経

の使にて参りける親隆のもとにいひやり

ける　　皇太后宮大夫俊成

墨染の袖をつゝむくなく猶日数ふる人も別かなしき

おもひまさりて侍りける人の身まかりて侍れハよ

める　　高陽院木綿四手

朝夕にみかきの花をくみし君かほとちかく別るゝ

神無月乃廿日あまりの比義孝之臣思ひ

そて侍るに鶴へくいひつかはしける

周防内侍

いひやらむしられぬ袂なりけれハ別れ

たのめける男のあとさへたえてなくなりにけれハ

守て　　よみ人しらす

今こんと思ひし別ハ君なれハけさ世にもさは打そ

おもひ出て侍る人の身まかりしときおもひてのちに

里よりける女京まてをくれくたりけるかへるに
彼男ひとりくたるとききてつかはしける

信生法師

行人の錦やいかにみえん岩居水又あふ坂の関こえなは
おほきまうちきみやさしくきこえ侍ける時よめる

藤原雅顕

あひみてやわかれしときも別れて又あふ坂の関となりけん

贈従三位為子身まかりて後　前大納言為世
申つかはしける

前僧正道性

思ひやれ色もかはらぬたもとにもなほしほれぬる袖のつらさを

返し

前大納言為世

これまてはへにける露の命まてかくてそ残る老のあはれさ

千首歌よませ給ひける

後宇多院御製

見し人のかゝる別ふたゝひわかれてのこるよはひをうきし

後光園摂政身まかりての比よみ侍りける

圓光院入道前関白太政大臣

同し根につゝける枝も枯れぬるをいかて接木の花残るらん

身まかりて侍りける人のその日よめる

よみ人しらす

いつまてか野への月はよそにみてかはらぬ命のうへに歎かん

小倉山にての詠とそ侍る

九條右大臣

明くれの月日の影はかはらねは我身のうへや海となるらん

成俊法師方へ申されてのち侍中納言敦忠

よつかへしける　貫之

明暮て年のみ抑し心をは世中はくれぬるなり

従一位殿に申されて後前右大臣定卿に

あくまてたくなりぬとゆくてやつかはしける

前大僧正覚忠

いかならは菩提に菩提をもとむへく迷の中に猶迷ふらん

家に百首哥よませ侍りける時

中務卿宗尊親王

いかにても思ひさためんうつゝとも夢ともなきは此世なりけり

思ひしらす　前大納言為氏

世中はたのまつそてうねれは眠りの夢もうつゝの現も

西行法師

うき人もあるをおもふも世中は眠のうちの夢とこそ見れ

西行法師すゝめてよませ侍りける百首哥の中に

前中納言定家

世中ハ秋やらぬまて續見乃紙あらさき身のむへき久

續後拾遺和歌集巻第十九

釋教哥

題しらす　前大僧正慈鎮

法乃門に出て入る世をいとふ人の
山寺に通ひて待もかね[illegible]
むかしとやて

和泉式部

梅とめにみひの歌をよそへるのこゝろ法の歌よ[illegible]

嘉元百首哥奉りける時釋教

前大僧正道玄

立帰り世のまよひに出かたき人よりのこゝろ[illegible]

教しらす　中務卿宗尊親王

さとりとてまよひの外にあらねとも心のうちにあるかまよへる

無量義経の心を　選子内親王

かくさかり人の心に任せさる仏のみのりをとりとめたるかな

久安百首に　皇太后宮大夫俊成

ちりうにも白ひたかはれの花なれのいまを盛にさきけるかな

源家長朝臣すゝめ侍りける一品経の序中

に序品　前大納言為家

みちしるぬ宅のさとに浄花は法の雨にそしめ也けり

是法住法位世間相常住乃心を

寂然上人

世の中はいかなる色にそみぬれとてしまくちる影の藏かえ

十如是乃心を讀侍りける中に如是報

後京極摂政前太政大臣

またこなたの世にてやつれをかきねかん難しきかなしかるらん

信解品　前大僧正慈鎮

ちかはしとなかめけるは世のへのかそへめての草枕に

薬草喩品　侍従源信

おなしく一味の雨のうるほひは草も木も人も仏となれるかな

法師品　選子内親王

すみてこそ心のとけさき法の海はまるの月はさえとぞすむ

則如佛現在　大藏卿隆博

やまちる梅の中にはわしのまへにさやけき月のかげやなれ

不輕品　前大僧正道昭

冬枯の霜は何かわきまへん枝にそこらの花もしるも

妙音品　堀河右大臣

三河せへき人をおしとおすまん潮をせよるす物かれ

嚴王品　法印覺實

あくれ稀なとのまうつる子樫原木の下露のいかに深からん

祝部成仲

めぐらすもとの海のふかければまたわたりぬらん

前大僧正親深

いかにしてひとつの河のみなかみや海とはやがての名をかへぬらん

結經とて　律師圓道

ところ宿る中にうつれる池の月さやけき法の花そさく

法印道我

身もさえ花さく池のほとりにはちりいかの風そふく

大日經住心品秘密主自心尋求菩提及一切

智何以故本性清淨故の心を

法印公惠

花の文露のうへとまるかくもかくも清き月そやとりける

如實知自心の心を　前権僧正定顕

こゝろつく今それはのあらつきのかきよるは法の海しかれはもる

阿字観を　前僧正公朝

萱はら中よりたれそのしるしある道まさしき道ハ本の一の也けり

不妄語戒を　権僧正憲実

法の国内のるふるの果しらぬらハ法の世にけてあしとされさけ

よつひ給はは寂照上人にあひて戒受けり

まかりて帰りまうれハ　三條院女蔵人左近

あひ見しもやよは涌て雲鐘すきて定なれぬか宿る月影

十楽の心をよみ侍りける中に

寂然法師

あらさりし紙にて新しくてゆかんむかしよりさらにまさる月かけ

文保百首奉りける時

二品法親王覚助

静かなる心の中にすみけれやかの月も霧も隔てさる

題しらす

法性寺入道前関白太政大臣

ちる月ハ心の海にある物をなにそてそれよそにまちらん

道基法師

津ゆかしへのやとれからかうちしあそてさやか月も出けり

前大僧正良信

寒けれは世のうさひとも澄まさる山月のよふかく入てそ見るか

金剛般若経如来者無所従来亦無所去と
いふ心を　　法印寿禅

出るも入もなくて是門の山のはの人まちえて見る月哉

無上菩提誓願證を　　千観法師

出かたくふかき月を求ても我身のうちに在物は

題しらす　　基俊

しくやましらくもの中や晴ぬらん西の山端にてる月をみて

久安百首歌に　　上西門院兵衛

世の中にうつりはてゝ見しもいかはかりかは人ゆへにこそ

唯識論今出唯識深妙理中得如実解
説作此論　　前僧正實聡

手向としおもふこゝろの水上は清き流をさきにこそしれ

未得真覚恒處夢中乃心を　　前大僧正範憲

まよひしも夢さめやらてそねふりの夢にまよへる身をそつらき

題しらす　　後深草院御製

出る日のひかりにまよふやみならてなとかはさとれぬ心なりけり

千首よませ給ひけるに

後宇多院御製

いかにしてなほそ佛てさかうあまりしとね識たりたる

題しらず

僧正道意

法乃道われそしるへき人しれ秘にかひある法代のわすれ

一流の法門を伝へ侍りける時

前大僧正慈勝

伝へくるかひやあらん法乃水をれの末代人に流れて

題しらす

天台座主覚助法親王

法の人こそ今も法に満たるゝ我山門のたれかまさらん

源空上人

我こゝろ池水にこそ似たりけれにこりもすみもなかれゆくまに

續拾遺和歌集巻第二十

神祇哥

石清水にまゐりて百首歌の中に

皇太后宮大夫俊成

かけまくもかしこきよゝの代を守る神やさだめん千世のかざしを

題しらず

権中納言師時

神風やいすゞ河なみたえせずて万代の君まもるらん

石清水社歌合に桜を

前大納言隆房

神まつるやよひになれば殿人の挿頭に折る山さくらかな

おなじ社にまゐりて百首歌の中に　藤原為道朝臣

をられぬる夜のこし代々のしるしとや神もうけけむ君がちとせを

宇佐使祭試楽の日舞人にまゐりけるを

とおもひて世をへまし

源 兼

あるじもさきに挿頭にさせる人の神の心やかはらざるらん

松尾祭の事奉りて後内侍の

もとへ文を入給へるを見てよめる

前兵部卿雅有

さらにくやしのとやおもふらんおのゝ尾山は秋そまさる

一條院御時の例にて後一條院春日行
幸ありける時上東門院おなしく出させ給ける
法成寺入道前摂政そのかみやおもひいてけん春
日野の行幸しけるもおもひ出て給はりける

上東門院

くもりなきよのひかりにや春日野のおなし道にもたつねゆくらん

神祇を　前大納言為家

春日野のむもれ江の道のうもれ水いにしへの神のちかひつくさん

春日なる神をも累代のまもりのこゝろにそひて

ちかひあん　中臣祐春

三笠山代々をかさねてつかへこしよりおもひたのまゝ

思ひしらすや　前関白左大臣　九条

行末も神のめくみは三笠山われはしの代のあとをさそへん

後三條前内大臣大将にて春日社に神
拝しける時おもひそひて詠侍ける

入道前太政大臣

今そしる宿世のたかき三笠山二たひ世にかへる神のちかひは

神祇を　津守国助

神垣やかんなきの山にまつらひていくとせかはる一榊葉

社頭雪といふことを
源二位氏久
はゝうん年をへにける中山神代乃松にあはゆきの雪
四條太皇太后宮住吉社に詣りて哥よみ侍ける時よみ
侍ける
康資王母
住吉の松にさそはれて八雲たちしあれし浦なみの色をそしる
上東門院出家の後社にまうでて世猶侍りて人々に哥よまれ
そ侍ける時まゐりてよみ侍ける
右御同君大后
住吉のきし姫重色におほく君かちとせをみゆるきみか松
保元二年十一月哥合によみ侍りける住吉社
にて侍りける
前大納言経信
君か代のちきりをそへる住吉の岸吹風をのみけふは
藤原範永朝臣摂津守にまかりて住吉社
に神くら源時奉らむとて侍りける時松のまにまに
神もなを沈ゆくまゝに詠み侍ける
津守国基
神代よりをそかみさひまされ住吉の松の陰よりかく
住吉に海そへてこそ見侍りけれ
道済

一 えらひゆくしきさえく我国にて代継めん住吉の神

題しらす　　平時香

住吉の岸なる草はしけれとも神よむかしの跡をとふらむ

津守国道

ゆりかけて神よろつ世もこの江にはみちをたえしやはん

文保百首歌奉りける時

民部卿為藤

ひかりてらす日吉の影なれは浪をわけし我為のあき

神祇の哥とてよませ給ひける

後光嚴院御製

あきらけき日吉の影を照らしてそのとけき御代のうへはみん

十禅師宮によみて奉りける

前大僧正道玄

神垣にこよひの月をみても猶おもふこゝろのかなひぬるかな

前大納言為世よませ侍りし日吉社歌合に神祇

前僧正桓守

いく千世と契るに神の影をみくさんとよ浪のうへにも

題しらす

入道親王尊円

祈りえよかゝるしみ身のつみそ縄神こそひかは我もたのまむ

式部成久

ねかふ心の末をかけくらの浦の神の七たひまて

前僧正植守人にすゝめて日吉社にて二首

哥合し侍けるに神祇

法印長舜

あはれとはおもひますゝ神も照しみよかくれなきまもうき世にはあれと

鳥羽院御時きさ女をかはいかけられ侍

法性寺小野社にて詠てしめる

仁俊法師

あはれとは神もこゝろにかけなん人とうたかはしまへ

まちちらむこれかれあはれなるらん

春日社にまうてけるみちにて

安嘉門院高倉

たのもしくいのりしうき世のちゝのまよ識の末も神そしるらん

おもしろく猶なるてなをしさけと

前大納言為世

後の世も此世も神のしるへそとたのむまことは猶まかせ

神祇をよめる

刑部卿氏

はるへきて千世にかはらぬ法の末は神のめくみにそ有

津守国冬

君か世はいのるかひあるみしめ縄神のこゝろもさしていくらめ

文保百首奉りける時

権中納言公雄

ゆふつくひかけそへ松に掛る千代よろつ人のおなし心に

題しらす

度会常良

民のため世をかいのる神やまのさかきの風はかはらさらん

百首歌奉りし時　　関白太政大臣

大沢の神乃めくみそ国なれはちよはかはらさらん

題不知　　御製

みかへの心し見たけをやまの神乃めくみは時なく

清輔朝臣

圖書局文庫

くもりなき浦のこの月やあふまれしをとめ姫の續きらん

日本紀をとりしきみのくもらぬ

賀茂久世

暮わけつ中山照月や神代をかけし続けるらん

題しらす

鎌倉右大臣

ゆきかへり和歌乃松原神代かけて代々絶ぬらん

武津の寿ふ

国立公文書館
National Archives of Japan